

OPECとロシア、減産拡大を検討 来年の早い時期に＝関係筋

【ロンドン 3日 ロイター】 - 石油輸出国機構（OPEC）とロシアが石油市場の強化に向け、来年の早い時期での減産拡大を検討していることが、OPEC・ロシア双方の関係者の話で分かった。

OPEC加盟国とロシアなど非加盟国で構成される「OPECプラス」は日量770万バレルの減産幅を来年1月に200万バレル縮小する予定。ただ、新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）に伴う制限措置がエネルギー需要に影響を与えているため、再考を迫られている。

ロシアの関係者は匿名で「第1・四半期には減産幅を拡大しなければならないようだ」と指摘。OPEC関係者は、現行の減産幅の延長以外の選択肢が模索されているとした上で、減産拡大はOPECプラス以外の産油国の市場シェア拡大につながるため「難しい選択」になると語った。

これに先立ち、OPEC加盟国のアルジェリアは、OPECプラスが来年1月から予定する減産縮小について、先送りを支持する意向を示した。

OPECの議長国を務めるアルジェリアのアタール・エネルギー相は、国営通信社APSに対し、原油価格が再び崩壊するのを避けるため、来年初めに数カ月間にわたり減産を延長する案を支持すると述べた。

また、新型コロナウイルスの感染第2波は、石油市場が「非常に危険な」状況に直面していることを意味すると話した。

経営ひと言／石油連盟・杉森務会長「注意深く見守る」

(2020/10/29 05:00)

「予測は難しいが、環境対策にどう取り組むかで変わる」と、米大統領選がもたらす石油業界への影響について指摘するのは、石油連盟会長の杉森務さん。

トランプ、バイデンの両候補はシェールオイルについての考え方が違う。「シェールが規制されると原油価格に与える影響は大きい」とみている。

また「イランが核合意に復帰し、イラン原油が拡大することは大きな要素」とし、対イランの外交政策も石油業界を大きく左右すると分析。米大統領選の行方を注意深く見守る。

ウメモト インフォメーション

引用：日経／化学工業／燃料油脂／新聞展望／他()

2020年11月4日 担当者：木佐野

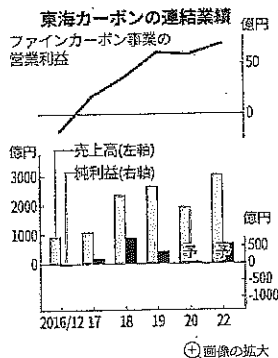
東海カーボン、脱・黒鉛電極依存のカギ握る「未来の柱」

東海カーボンが4日午後3時に2020年1～9月期の連結決算を発表する。四半期別にみると7～9月期の営業損益は10億円強の黒字となり、2四半期ぶりに黒字転換したもようだ。半導体などの製造に使うファインカーボン（特殊黒鉛製品）が業績を下支えている。課題となっていた「脱・黒鉛電極依存」が進み始めているようだ。

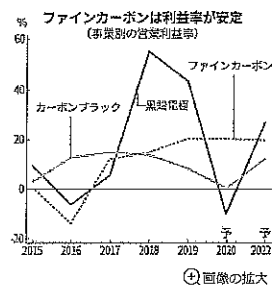
「もし多角化していなかったら新型コロナウイルスのダメージはさらに大きかっただろう」。東海カーボンの長坂一社長はこう話す。20年12月期通期の連結営業利益予想は前期比89%減の61億円。主力の黒鉛電極事業の営業損益が37億円の赤字（前期は393億円の黒字）になるのが響く。黒鉛電極は2年前までの「ハブ」のような状況から一転し、市況が悪化した。

その中でコロナ耐性をみせるのが、ファインカーボン事業だ。20年12月期の営業利益は前期比微減の60億円に踏みとどまる見通し。あらゆるモノがインターネットにつながる「IoT」の広がりや高速通信規格「5G」の普及で半導体需要が伸びていることが下支えている。長坂社長はかねて「黒鉛電極やタイヤ向け部材のカーボンブラックの比率が高く、それがつまずくと利益が安定しない」と自社を分析。将来の柱になるような事業を育てるべく、多角化を進めてきた。

ファインカーボン事業は微細な炭素の粒子を加工して作る製品を扱う。熱や腐食に強く電気伝導性が高いなどの特徴があり、半導体製造のような高精度の作業が必要な分野のほか、太陽光パネルや金型などにも使われる。



11/4



東海カーボン、脱・黒鉛電極依存のカギ握る「未来の柱」

需要の浮き沈みが激しい黒鉛電極と比べて安定的に利益を出している。15年12月期から20年12月期予想までの売上高営業利益率の推移を見ると、黒鉛電極は9%から55%まで伸びた後、20年12月期に一転して赤字に落ち込む見通しだ。一方、ファインカーボンの利益率は17年12月期以降に上昇し、20%前後にまでなった。この5年で採算の低い製品から撤退しつつ、成長が見込める分野では買収による事業強化に取り組んできた。

16年には田ノ浦工場（熊本県芦北町）の等方性黒鉛の生産能力などを削減して採算を改善させ、18年には約78億円を投じ、持ち分法適用会社だった韓国東海カーボンを連結子会社にした。

半導体素材のシリコンウエハーを薬剤やガスで加工する際に、不要な酸化膜を除去するための装置に組み込む部品「ソリッドSiC」が強みで、韓国サムスン電子や東京エレクトロンなど大手の半導体メーカーや半導体製造装置メーカーを顧客に持つ。韓国東海カーボンの19年12月期の純利益は17年12月期比で26%増えた。

22年12月期までの3年間の中期経営計画では、ファインカーボン事業の営業利益で70億円を目指す。20年までにソリッドSiCの生産能力を2割高める方針を掲げる。今年7月に約197億円で買収したフランスの炭素黒鉛製品メーカー、カーボン・サボフ社を通じてフランスに製品の一部を集約することも検討している。

前期は1割強のファインカーボンの売上高構成比が高まるほど、業績の安定性は増す。株式市場ではファインカーボンの成長期待と黒鉛電極の復調期待が相まって、東海カーボン株の予想PER（株価収益率）は250倍を超える水準にまで上昇した。市場の高い期待に応えるためにも、決算説明会では脱・黒鉛依存に向けた一段の進捗を示していく必要がある。





ウメモト インフォメーション



2020 年 11 月 2 日 担当者: 水谷

仏石油大手トタル、純利益93%減 7~9月期

2020/10/30 20:07 | 日本経済新聞 電子版

【ロンドン=篠崎健太】仏石油大手トタルが30日発表した2020年7~9月期決算は、純利益が前年同期比93%減の2億200万ドル（約210億円）だった。新型コロナウイルスの影響による石油需要の低迷で利幅が大きく悪化した。減損損失がかさんだ4~6月期（83億ドルの最終赤字）に比べると好転した。

売上高は36%減の272億ドルだった。石油の平均販売価格は1バレル39.9ドルと31%下がった。液化天然ガス（LNG）も4割安と落ち込んだ。

原油相場が4月の歴史的な急落から持ち直し、4~6月期比で損益が上向いた。一過性の影響を除外した調整済みの営業損益は、探査・生産部門で4~6月期の2億900万ドルの赤字から、7~9月期は8億100万ドルの黒字に転じた。



仏南部マルセイユ近郊のトタルの製油所=ロイター

パトリック・ブヤンネ最高経営責任者（CEO）は声明で「石油輸出国機構（OPEC）プラスの協調減産や、陸上輸送向けの石油需要の回復で恩恵を受けた」とコメントした。ただ厳しい収益環境は続くともみてコスト削減を進める。20年通期の投資額は「130億ドル未満」との目標を示し、7月下旬時点の想定より10億ドル圧縮した。

化石燃料事業の合理化を進めつつ、クリーンエネルギー分野の強化を急ぐ方針だ。インドでの太陽光発電資産の取得などで、9月末の再生可能エネルギーの設置済み発電容量は5.1ギガ（ギガは10億）ワットと1年前より85%伸びた。

原油先物は続落、コロナ第2波響き月間で約10%下落

【ニューヨーク 30日 ロイター】 - 米国時間の原油先物価格は続落。欧米での新型コロナウイルス感染拡大が重しとなり、月間ベースでも2カ月連続の下落となった。

清算値は、北海ブレント先物の期近物LCOc1が0.19ドル（0.5%）安の1バレル=37.46ドル。前日は一時5カ月ぶり安値を付けた。1月物LCOc2は0.32ドル安。

米WTI先物LCOc2は0.38ドル（1.05%）安の35.79ドルだった。前日は6月以来の34.92ドルに下落していた。

月間ベースではWTIが11%、北海ブレントが10%それぞれ下落した。

ライスタッド・エナジーの石油市場アナリストは「石油消費が多い大半の国では第1波時になかった感染レベルになっている」とし、ロックダウン（都市封鎖）導入で石油需要が影響を受けると述べた。